



倉天心全集  
6

平凡社

岡倉天心全集 (全九卷)

第六卷 定價 五四〇〇円

一九八〇年一月二八日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地  
郵便番号一〇二  
電話〇三(二六五)〇四五  
振替 東京 八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社  
製本 株式会社石津製本所

## 凡 例

一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能な限り蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。

二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。

三、英文の著書、著述、未発表草稿、書簡は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。

四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査ノートなどは、できるだけ原型を損わぬよう翻刻した。

五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。

1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。

2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。

3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 ぢ↓れ)、合字(例 死↓トモ)などは通行の文字に改めた。

- 5 底本が自筆原稿の場合、文意の通じにくい字句、固有名詞の誤記などは「」内に註記した。(例 渴ヲ医スル〔ニ〕足ル、姜委)<sup>〔維〕</sup>
- 6 句読点、改行、字下りなどの扱いは、通行の方式にしたがって整理したが、底本が自筆原稿、書簡などで句読点のない場合は、おおむね句点にあたる箇所および読み誤りやすい箇所を一字あけにした。
- 7 みせ消ちは原則として翻刻せず、内容理解に必要と思われる場合のみへゝ内に翻刻した。
- 8 破損、その他判読不能の箇所は、□□、□□、□□のように示した。
- 9 必要に応じてルビを付し、現代仮名遣いをもって表記した。底本が総ルビの場合は、特殊な読み方などを残し、他は省いた。
- 10 天心作の漢詩は第七巻で一括して註釈を付すため、本文中では白文のままとした。

本巻(第六巻)には、明治十三(一八八〇)年から四十二(一九〇九)年にいたる書簡四一五通を収録し、「書簡I」とした。

書簡は年代順に配列して書簡番号を付し、和文書簡と英文(翻訳)書簡の区別は、書簡番号の字体を変えて示した。英文書簡の訳者は大岡信氏、小野二郎氏、石橋智慧氏である。各氏担当の書簡番号は、巻末に記した。各書簡については、「書簡解題・註」およびその「凡例」に詳記した。

なお、「書簡II」(明治四十三年から大正二年まで)および全書簡にわたる「書簡番号索引」は、本全集第七巻に収録する。

目  
次

## 凡例

明治十三	(一八八〇)	年	5
明治十四	(一八八一)	年	6
明治十五	(一八八二)	年	7
明治十七	(一八八四)	年	9
明治十八	(一八八五)	年	19
明治十九	(一八八六)	年	20
明治二十	(一八八七)	年	23
明治二十一	(一八八八)	年	30
明治二十二	(一八八九)	年	38
明治二十三	(一八九〇)	年	46
明治二十四	(一八九一)	年	52
明治二十五	(一八九二)	年	58
明治二十六	(一八九三)	年	63
明治二十七	(一八九四)	年	69
明治二十八	(一八九五)	年	73
明治二十九	(一八九六)	年	83

明治三十	(一八九七)	年	.....	92
明治三十一	(一八九八)	年	.....	100
明治三十二	(一八九九)	年	.....	111
明治三十三	(一九〇〇)	年	.....	124
明治三十四	(一九〇一)	年	.....	136
明治三十五	(一九〇二)	年	.....	149
明治三十六	(一九〇三)	年	.....	153
明治三十七	(一九〇四)	年	.....	159
明治三十八	(一九〇五)	年	.....	192
明治三十九	(一九〇六)	年	.....	233
明治四十	(一九〇七)	年	.....	271
明治四十一	(一九〇八)	年	.....	309
明治四十二	(一九〇九)	年	.....	340
解説	.....	.....	.....	383
書簡解題・註	.....	.....	.....	399
			岡倉古志郎	



岡倉天心全集 第六卷



書  
簡  
I



明治十三（一八八〇）年

1 十一月二十七日 駒井道義あて 封書〔封筒ナシ〕

昨日メーソン氏同道<sup>\*1</sup>にて海軍省ニ到候処ピアノハ巳<sup>マ</sup>ニ鄂羅中将の旅館（河村参議邸（三田小山町九番地）へ移し候ニより海軍楽長の誘引<sup>\*</sup>にて該所に参リシニ教師ピアノノ正調ニ非ザルヲ憂ひ猶又明後廿九日ニ参館致し本調ニ直シ度由申居候 若又伊沢氏御尋<sup>\*2</sup>ネ有之ハ宜敷様御風声願上候也

十一月廿七日

覚三拝

駒井道義先生大人

明治十四（一八八二）年

2 十一月九日 伊沢修二あて 封書〔委託便〕

【表】〔破損〕 伊沢修二様 覚三拝緘

【裏】〔破損〕 十一月九日 蠣壳町壹丁目三番地 岡倉覚三〔封印の上部は破損、下部に「封」〕

拝白

取調御会之日ニ当リ殊ニ恐入候へトモ小生儀去ル六日之湿気ニ感シ頭痛裂シ  
く何分今日ハ参場仕兼候間倦怠之段御海容願上候也

十一月九日

覚三再拝

伊沢校長 案下

断紫零紅有夙因 傷秋容易瘦吟身

三生君是憐花客 許此善愁多病人\*

明治十五（一八八二）年

3 一月十三日 伊沢修二あて 封書〔委託便〕

【表】音楽取調所 伊沢書記官殿 急

【裏】岡倉覚三 一月十三日〔封印〕メ

御繁務之際恐入候へ共左之諸項御教示相成度奉願候

(一)

○メーソン氏帰国旅費之金額ハ幾何ニ候哉

○同氏再度渡航の旅費は自弁タルへき哉

○其他同氏旅費は現今如何之俸ニ相成居候哉

(二)

○同氏給料ハ昨年何月迄払切ニ相成居候哉

○其他同氏の給料如何相成居候哉

右は小々差急ぎ候廉モ有之候ニ付此段宜敷願上候也

一月十三日

伊沢書記官殿

頓首

岡倉覚三



明治十七（一八八四）年

4 九月一日 森田思軒あて 封書

【表】〔不明〕

【裏】下谷区本町卅一 岡倉覚三

拝啓 此度ハ御同遊□得候間近頃愉快の事ニ御座候 然レハ九鬼氏ハ愈来ル五日近江丸ニて出発 午前九時四十分  
五分の急車ニて横浜に行ク都合ニ有之 右不取敢申上度

九月一日

草々頓首

覚三

森田先生